

その後の出会い

千田 稔

私が日文研に着任したのは一九九五年四月である。阪神・淡路島大震災の復興に必要な物資を積んだトラックが国道九号線をひっきりなしに走っていた。国道を北に折れてしばらく行くと日文研の建物がよく見えた。ところが二〇〇八年に退任する二、三年前から住宅地が拡大し、京大工学部の建物が広い敷地に林立し、日文研の建物は埋没した。

日文研あたりの住宅地は桂坂という名で呼ばれているが、開発業者の命名で正式の地名ではない。何々坂という呼び名は、都会のおしゃれな一角をいうのであろうか、近年の女子のアイドルグループに乃木坂46や欅坂46があるが、これらの坂の名は桂坂同様いずれも正式の住居表示ではない。桂坂という名は東京好みの、今風の言い回しで言えば、こじやれた呼び名であったようだが、アイドルグループに先駆けていたとは、命名者は大した語感の持ち主であったようである。

日文研の向かい側に桂坂小学校がある。今も続いているのかどうか知らないが、日文研のスタッフは小学生に年に一回程度、授業を担当することになっていた。私は、地名についての話をし、この学校の名前の桂坂は正式の住所表示でないので、郵便番号もないという意味のことを小学生に話した。たちまち子供らの顔に落胆の表情が浮かんだ。学校名をつける時に、いろいろな事情があつたことだろうが、私は子供たちを悲しくさせてしまった。

日文研時代の仕事で地名に関わるのは、科学研究費によるもので、『大日本地名辞書』の著者吉田東伍について、わずかながら調べたことである。『吉田東伍 前期論考・随筆選』を新潟県北蒲原郡安田町教育委員会（当時）の渡辺史生氏と共編し、「日文研叢書」に加えていただき、その後、単著で『地名の巨人 吉田東伍』を上梓した。私は研究を職とし始めたころから、吉田東伍の評伝を書きたかったが、やっと日文研時代に曲がりなりにも実現した。この仕事は、予想もなかった出会いを生むことになった。

吉田東伍の主たる業績は『大日本地名辞書』であることは、いうまでもないが、その刊行が完成したのは一九〇七年である。その翌年、秘蔵されていた世阿弥の一六部集を目にして一九〇九年の二月、『能楽古典 世阿弥十六部集』を世に出す。能楽の世界では画期的な出来事であった。

吉田東伍と能のつながりについては、私の関心の外にあった。ところが二〇〇九年三月に早稲田大学で開かれた能楽学会で「吉田東伍 学問と人」という演題で話すようにと招かれた。すでに日文研を退任して一年を経た時である。おそらく東大の松岡心平氏からお声をかけていただいたように記憶する。そしてその年であると思うが、平城京遷都一三〇〇年祭を翌年に控えて、国立能楽堂のニューズレターに短文を寄せるようにとの依頼があった。能が京都で生まれたように思う風潮があるが、実は奈良（大和）が発祥の地であるということを述べ、京中華主義におちいりがちな日本文化論の陥穽に触れた。

そのようなことがあって、いつのまにか、私は能楽関係者の中で、能楽を知らない研究者となくなってしまった。そして能楽小鼓方大倉流十六世宗家大倉源次郎氏が奈良県桜井市多武峰談山神社にて談山能の制作を担当されることになり、お誘いを受けることになった。談山神社に

は、「摩多羅神」とよばれる能面があり、能楽関係者にとってはこれまでその解釈について議論がなされてきたが、談山能の監修者である二六世観世宗家観世清和氏が「摩多羅神面」を用いて能が奉納される。談山能は二〇一二年以来毎年開かれてきたが、昨年の五回目でありえず幕をとじ、その後は、構想を新たにしているという。何回目であったろうか、談山能の顧問をされている梅原先生と会場でお会いする機会があった。

このような能楽とのご縁で、ある時、大和の能楽発祥の地をめぐる。それは、談山能のシンポジウムで、私は、秦氏の支配圏であった大和川の支流である寺川流域に能楽の足跡がみられると発言したことによる。私は、幼少のころから親しんできた寺川が、中世芸能文化の母胎であったことを、あらためて知ることになり、自ら少なからず衝撃をうけた。

話は日文研退任の頃にもどる。その頃万城目学氏の小説「鹿男あをによし」のテレビドラマの歴史考証をしていて、退任の講演の前日に主演の綾瀬はるかさんや玉木宏さんからスタッフとの慰労会が予定されていた。私は、出席したいという気持ちが強かったが、もし飲みすぎて翌日の講演に差しさわりがあつては困ると、自制した。

講演を終えて、知人とタクシーで奈良に向かった。たまたまその車にテレビがついていた。ちょうど「鹿男あをによし」の放送時間だった。運転手にチャンネルを選んでもらった。こころざしは、はたせなかつたけれども、青垣めぐる故郷へと車は暗やみの道を走っていた。あをによしの故郷へと。

(国際日本文化研究センター名誉教授)